インド留学記

その2

学問の町プーナ

東方学院講師
駒沢大学講師
阿部　慈園

一

プーナは、実はイギリスの命名で、本来のインド名は、プネーといいます。しかし、一般には「プネー」より「プーナ」のほうが通りがよいので、ここでは便宜的にこの町をプーナと呼ぶことにします。

現在プーナ市の人口は約一三〇万を数えます。郊外の人口を併せますと、一五〇万ともいわれます。四月、五月の炎暑期（日本の夏に相当）は、とても熱く、摂氏四二度を経験したことがあります。それでもインドの人たちは、ここを避暑地の一つと見ています。海抜は六〇〇メートルほどで、むしあついボンベイから汽車で上ってきますと、車窓からのひんやりとした涼風がほほをなでます。飛行機は、朝夕二便がボンベイ・プーナ間を飛んでいて、所用時間は三〇分あまりです。

このプーナの町は、かつてマラータの英雄シヴァージーを生んだペシュワ王朝が栄えた町です。四方を小高い山に囲まれ、古都としての落

ちついたたたずまいを見せています。その風格と気品は、わが国の京都や奈良の町をほうふつとさせます。四年半の留学生活を送ったわたくしにとって、このプーナの町は第二のふるさととともいうべく、なつかしくそしてあたたかい町になりつつあります。

二

この町は、デカン高原における農産物および果実の集散地の一つでもあります。菜食主義者（ヴェジタリアン）の多いこの町は、野菜が豊富でかつ安価です。菜食主義はバラモン階層の人たちに多く、その食習慣は一般の人びとに強く影響を及ぼしています。一説によれば、肉食より菜食のほうが、家計費が三分の一ですむから、ともいわれています。ヴェジタリアンたちは、重要なタンパク源を主として牛乳（水牛のミルクが主）と多種の豆類とから摂っているようです。

果物も多く、安価で美味です。熱い夏の贈り物マンゴーは、三月の末ころからあらわれはじめます。パプースという名のマンゴーが特においしい。パパイヤやジャック・フルーツも楽しめます。小さめのモンキー・バナナや赤バナナも、輸入物とは一味ちがいます。ココナッツの青くさい味は、今となってはとてもなつかしい。みかん類は、甘ずっぱいサントラー（日本のみかんの味にやや近い）とさくさくしたモーサンビーの二種があります。ラーマの実（ラーマ・プル）、シーターの実（シーター・プル）もわが国には見られない珍果。後者は、あけびに似た味がします。

三

プーナは、また軍事都市としての側面ももっています。ここにはインド南部軍および空軍の司令部があります。また国防大学も存します。インディラ・ガンディー首相を暗殺したのはシ

ク数徒の近衛兵ですが、ここでも体格がよく、ひげもじゃで、ターバンを頭に巻いたシクの軍人をよく見かけます。治安がよく整い、十二時すぎの夜間外出にもほとんど不安がないのも、この町の特長といえましょう。

最近、この町は工業都市としての一面も兼ね備えてきました。ボンベイへの道路ぞいに大きな工場が建ちはじめ、いわば「ボンベイ・プーナ工業地帯」ができつつあります。わが国との提携会社も一、二を越え、日本からの技術指導員が時おりおとずれています。プーナの若ものたちは、大学卒業後、報酬のよいエンジニアや公認会計士をめざすものが多くなってきました。

四

このように、プーナはさまざまな顔をもつ町ですが、伝統的には「学問の町」と呼ばれるべきでしょう。といいますのは、この町にはバラモン階層が多く、教育のとても熱心な町だからです。したがって、学問研究、特にサンスクリット（梵語）学の盛んなところでもあります。

市内には、多くのカレッジ（単科大学）や研究所があり、それを兼併統合してプーナ大学が存在します。一九七四年の報告によりますと、一一五のカレッジと一四の研究所を数えます。そのうち、サンスクリット学の四大研究機関として、㈠プーナ大学サンスクリット科、㈡デッカン・カレッジ、㈢バンダル研究所、㈣ヴェーダ研究所が挙げられます。わたくしは、㈠に所属し、㈡に時おり通い、㈢のゲストハウスに止住して博士論文をまとめました。

プーナ大学は、特に文法学・ヴェーダ学が盛んで、最近では論理学を学ぶ学生も増えています。戦後欧米やわが国からも多くの研究者・学徒がここに学び、現在でも常時数人の日本人留学生が、真剣にインド学・仏教学を修めています。

（つづく）